

# 土のこやし

かつて、何か考えるヒントになればと、授業の前に短い話をしていました。以下は、r それを文にまとめたものです。「土のこやし」と題したのは、直接作物の生長に効かなくとも、育つ土壌が豊かに整備されてあれば、結局は結果に響くだろう、少し遠いが手助けとして、という意味です。1) ~20) は、1995年に整理したもの、21) ~30) は2000年に追加したものです。話題として、古くなっているものもありますが、あえて、再録しておきました。

## 目次

- 1) 学べば禄其の中にあり
- 2) 身自ら之に当たる
- 3) 弁慶の続飯（そくい）
- 4) 心の貧しい人々は幸いである
- 5) 白鳥，蘆花に入る
- 6) 愛語
- 7) 布施，利行，同事
- 8) お釈迦様の教育法
- 9) 「困難はくぐりぬけよ」
- 10) 肥しもくめて，ピアノも弾けて
- 11) 牡蛎の安全観
- 12) 箱根の山籠
- 13) 頭燃を払う
- 14) 脚下照顧
- 15) 百尺竿頭進一步
- 16) 教室は誰のものか
- 17) ある部員の話
- 18) オーストラリアの舵鳥
- 19) 帽子の如く，外套の如く
- 20) 野の百合，空の鳥を
- 21) 地下足袋はいても偉い人は偉い
- 22) ミルクを飲む人よりも，運ぶ人が健康になる
- 23) 人の作ったものは偽である
- 24) 真民五訓
- 25) 和を知って和すれども，礼を以て節せずんば，・・・

- 26) ひとに頼るな (?)
- 27) イマジネーション
- 28) 言葉の役割, 言葉の汚染
- 29) 精神のない専門人, 心情のない享楽人
- 30) 事実があれば, 安心する

## 1) 学べば禄その中にあり

学問や勉強について、学問や勉強は役に立つものでなければいけないとしばしばいわれたりします。しかし、多くの場合、学問や勉強は、少なくともすぐには役立たない、あるいは全然役立たない如くに見えます。ファーストフードで食事をするのとは違うのです。そうすると今日の我々は非常に不安になります。すぐに役立たないことをするのはバカげたことだ、悪いことだと思ひこんでいるからです。本当に、そうでしょうか。論語に「学べば禄其の中にあり。耕せば飢え其の中にあり。」という言葉があります。禄とは俸禄のことで、今でいえば給料、生活の糧のことです。生活の糧になるというのは役立つということの究極の意味でしょう。

この句の意味は、勉強は一見、生活あるいは生活の糧とは無縁のようにみえる。つまり、せいぜい趣味的なことのようみえる。だから学びながらもそんなことをやって何になるんだと、不安になる。しかし心配しないでよろしい。生活のもと、禄は必ずその中にある、それどころか禄というのは学ぶことを基礎としてその上に大きく開かれるものである。その証拠に、かえって目先の効果ばかりねらって動いていると、その時一時はいいかも知れないが、すぐ行き詰まってしまう。「耕せば飢え其の中にあり」である。つまり、耕していれば食いつばぐれはないはずだが、学ぶことの基礎なく単に耕しているだけでは視野が狭いから、往々にして、耕していて最終的には逆に飢えてしまうことがある。

せつかく大学に入った、大学は勉強するところです。勉強によってはすぐに役立たないものもあります、またなぜこんなことをやるのか見えてこないものもあります。しかし禄はその中にこそあるのです。いったん大学に入ったのだから、人がなんと言おうと、迷わずに勉強に専念せよ、そういうことです。

## 2) 身自ら之に当たる

これは浄土仏教の経典「大無量寿経」の中のことばです。この句の後に「代わる者有ること無し」と続きます。ある人、今日は名を成している人ですが、若い頃、親に死なれ、貧しい境遇の中で先の見通しもなく、悩みながら自暴自棄的な生活を続けていました。たまたまその人はお寺の出身でしたから、自分のところにあった「大無量寿経」を読み直してみたというのです。そしてこの文句のところに来たときはたと感じました。「大変だ、大変だ」。つまり今自分はヤケ気味な生活をしている。そこにはしかし、今

の境遇は自分の責任ではない、人のせいだという、甘えがあるのではないか。だが仮に人のせいであったとしても、現実には自分の生活は自分の生活であり、何が起ころうとことがらはすべて自分で身に受けなければならない。代わってくれる者はいない。原因が何であろうと、また理屈がどうであろうと、結果を引き受けるのは全部自分です。だからよく考えてみれば、大変だ、というわけです。

仮に幸せな境遇にいる人にもそれなりの甘えがあります。いつまでもそういう境遇が続くはずだと思っていることです。しかし境遇は変化します。そのとき、変化した例えば悪い境遇でも、受けなければならないのは自ら以外にはありません。反対に、不幸な境遇にいる人は、この場合のようにそれを他人のせいにします。そうするとそれは人ごとになってしまいます。しかし、ことがらは、いずれにせよすべて自分にかかってくるのです。だれも代わってはくれません。

経典には、その前にさらにこうあります。「我々は独り生まれ、独り死し、独り去り、独り来る」ものである。ですから、どういう人生を送るにしても、すべては「身自ら之に当たる、代る者有ること無し」なのです。

### 3) 弁慶の続飯(そくい)

斉藤秀三郎という英文学の先生がいました。岩波から熟語を中心にして『英語中辞典』という評判のよかった辞典を出していますから、すこし古い年代の人はよく知っています。この先生が、語学の勉強は「弁慶の続飯(そくい)」ではいけないということを行っています。

弁慶とは義経の家来のあの大男の弁慶です。続飯(そくい)は知らない人がいるかも知れませんが、むかし、紙や木の接着剤として用いた、ご飯粒を練って作った一種の糊です。木などを貼るのに最適でした。強力なそくいを作るコツは、ご飯粒をあまり多くない量とって、へらで、粘りけがでるまで何度でもていねいによく練ることです。一度にたくさんではダメです。少しずつていねいにやるのが大切です。あるとき弁慶はそくいを作るよう義経から命じられました。弁慶は力持ちですから、よし来たとはばかり、おひついっぱいのご飯を大きな板の上にひっくり返して、長刀のような大きなへらでかき混ぜ、またたく間に大量のそくいを作り上げました。しかし使ってみたら練りが足りず、あまりよく貼りつかなかったというのです。

斉藤先生がいうには語学の勉強がまさにこういうことで、力まかせに、一度にたくさん勉強しても、その時は憶えたような気がするが、すぐ忘れて役に立たない。その日に使う分だけ、少量を時間かけて丁寧に勉強し、それを積み重ねていくのがよい、一どきに大量ではなく、「こつこつ」というのがこつだというのです。一夜づけの勉強などというのは弁慶のやり方で、これではダメなのです。

人生もそうで、毎日々々、その日の生活を、よくばらずに丁寧に過ごしていく。退屈で、まだるっこくて、大きくは進まないようであるが、日がら経ってみると、確実に

それなりのものに成っているのだ、というのです。

#### 4) 心の貧しい人々は幸いである

これは新約聖書の「マタイによる福音書」にある、「山上の垂訓（説教）」の一節です。英訳では、"Blessed are the poor in the mind" となります。ここで心の貧しい人々

とは何でしょうか。心において貧しい、つまり心が満たされていない者ということでしょう。具体的には、弱かったり、失望していたり、絶望していたりする、ということでしょうか。そういう人が幸せなのだ、祝福されているのだということなのです。

しかし、そうするとちょっと奇妙に思われます。普通私たちは万事に満足している人、ことがら思うように進んでいる人、つまり心において満ち足りている人、そういう人を幸せとよびます。にもかかわらずここでは、そうではなくて、弱かったり、絶望している人が幸せなのだということなのです。これは一つの逆説です。

なぜここに逆説が成立するかといえば、第一に、神様はまさしくそういう人々のために存在するものだから、ということなのです。そのことによってこそ神様の存在が確認できるわけです。第二には、満ち足りた者が幸せなら、それは当たり前で、そのために特別なことがらは不要です。幸せでないものを幸せにしようとすると（宗教とはまさに、そういうものであるはずですが）、そこに逆説が成立していなければなりません。

実は、宗教の基礎にはこのような逆説があります。ですからこういう逆説を必要としない人には宗教は無縁ということになります。しかし、そうすると宗教は少数の満ち足りていない人々だけのものかと思われるかも知れませんが、よく考えてみれば、見てくれないかに幸せに見えても、それは見えだけのもので、厳密な議論をしたときに本当に満たされていると言いきれる人が何人いるのでしょうか。とすれば我々は皆、心の貧しいものであるということになってきます。実はそのことの自覚がもう一つ宗教の基礎にあるのですが、とすれば人はすべて逆説を必要とすることになり、宗教は万人に必要なものになります。

また、「心の貧しき人々」を、貧しければ足りないものを自覚して真剣に求めることになりますから、真剣に求める人々の意味にもできます。すると、これは真剣に求めるものには神様はきっと与えてくれるのだという励ましにとることもできます。

#### 5) 白鳥、蘆花に入る

これは禅のことばです。通常の解釈によれば、白い白鳥が白い葦の花の中に入ると、白鳥も葦も共に白いから区別がつかない、自己と環境が一つに溶け合っている境地を示すなどとされます。禅の言葉はなかなか機知に富んでいて、「銀腕に雪を盛る」「明月に蔵を隠す」なども同じ様な意味です。

私はこの句を初め、下村湖人の『次郎物語』で感銘深く知りました。そこでの説明は、あるとき白鳥が一面の白い葦の花の中に静かに降りた。白い花の中に白い鳥であるから、

それが降りたことが、周辺にもほとんど分からない。にもかかわらず、あの大きな羽でふわっとくるから、周辺の葦は静かに揺れる。つまり白鳥は目立たないけれども確実に周辺に影響を与えていく。人間についてもそういったあり方が望ましいのだ、そういうことでした。この解釈の方が面白いように思います。

これを、集団ないしは仲間の中での個人のあり方という観点から考えてみます。今日は自分をアピールしなければいけないなどといわれて、内容のあるなしよりも目立つことが奨励されたりします。この例でいえば、赤い服を着て白い葦の中に騒々しく入って行け、それがいいことだということです。確かに目立ちます。しかしそのことが何らかの効果をもつのは、えてしてその時だけのことです。それよりも、仲間の中で、ほとんどいるかいないか分からないほど目立たないが、しかしその集団の中で確実にある役割を果たしており、周辺に抜き難い影響を与えている、しかし、それがいかにも自然体であるから誰にも分からないほどである。あるいは作意的でないから自分にすら分かっていない、こんなあり方の方がかっこいい（素晴らしい）もののようにも思われるのです。我も我もと目立ちたがる、自分が自分であるとは目立つことに外ならないというような現今の世の中で、こういった生き方を指すのもいいではないでしょうか。

## 6) 愛語 (四摂法)

古く仏教で、皆が集まって修行する集団をサンガ (僧伽) といいますが、そのサンガで皆がまとまって仲間とうまくやっていくのに4つの心構えが言われています。四摂法と呼ばれるものですが、そのひとつがこの愛語です。

愛語とは、やさしい言葉、おもいやりある言葉、慈愛の言葉、そういった言葉を人にかけなさい、ということです。具体的には、一番簡単には、人に対して「こんにちは」、 「おはよう」、 「元気ですか」と声をかける、そのことです。これらは何か情報を伝えようというのではない、特に意味のある言葉ではないのですが、これによってお互いの心が開けていく、それは体験的に分かると思います。いまは特に若い人はその意味で無口になりました。いったん知り合った仲間の中では饒舌にしゃべるのですが、面識の無い人、初対面の人にたいして、言葉を掛け合うことについては逃げ腰です。特に、こういった用向きを伴わない、何気ない言葉はできません。ある学生にそのことについて訊いたら、声をかけてもし返事が返ってこない、いわば無視されたらどうしようと思って声がでないのだといっていました。それでも敢えて、言葉を掛けるのを愛語というのです。それだけでなく、逆に話しかけられたら、それなりに受ける、というのも愛語です。受けることも大事なことです。今は話しかけもしない、受けもしないという人が多い。

人間は言葉によって互いに繋がれている動物で、言葉のやりとりにこそ生きている楽しみがあります。もっといえ言葉があつてこそ人間があるのです。言葉を用いることがすなわち人間の生活です。用事するときしゃべるのも必要ですが、その前に人間生活

の第一歩はこうした特別に内容があるわけではない言葉の掛け合いにあるのです。

## 7) 布施, 利行, 同事 (四摂法)

人はコミュニティ, つまり仲間の中で生きる者だとして, そのコミュニティをうまく維持する, あるいは人心をまとめ, 治める, そのための4つの方法として, 仏教では四摂法というのがいわれます。すでに述べた愛語のほかに布施, 利行, 同事というのが, ついでに説明しましょう。

「布施」というのは与えることです。与えるものは金品に限りません。知識を与える, つまり人にものを教えてあげるもこれもそうです。ただし見返りを期待してはいけません。それでは取引になってしまいます。互いに無償で与え合う, これはオレのものだとこだわらない, そういう気持ちでいる, そこにいい関係が成立するというのです。

「利行」は人のためにつくす, 自分ではなく人を利する行いをする, そういう事です。もとより見返りを望まずにです。今ボランティアなどといわれるのはこれでしょう。これは分かりやすい。

「同事」とは協力していく, 互いに助け合い, 協同していく, ということ。もっと単純には, 相手と同じことをしていくことです。体験的にもみんなで同じ仕事をわいわい言いながらしていくそこに親しみが生じる, あるいは自分と同じことをあの人もやっている, その人に親しさを感じます。

四摂法とは, 布施, 愛語, 利行, 同事の4つですが, それはいいかえれば, 与える気持ち, やさしい言葉をかける気持ち, 相手のためをはかる気持ち, 何でも一緒にやる気持ち, ということ。そしてその根本には見返りを期待することなくというのが入ります。ここが難しい。しかしこういう気持ちをもっていれば, コミュニティはうまくいくし, また本来コミュニティは, ひいては人間生活はこういうものであればよいわけです。

## 8) お釈迦様の教育法

大村はまさんは長い間東京で中学の国語の先生をしており, 国語の教科教育で有名な先生です。大村さんの随筆集『教えるということ』の中にこういう話があります。

大村さんがあるとき, 自分の師匠筋にあたるある先生を訪ねた。その先生曰く「大村さんは熱心で, 生徒にも好かれているようだが, まだ達人には至らないだろう。教育の達人とはこういうものだ」というのです。つまり, あるとき, 轡上がりのぬかった坂道を, 男が重い荷車を引いて上がってきた。そしてぬかるみに轍を取られてにつちもさつちもいかなくなつて苦勞している。このときそれを見ていた人々の反応はいろいろであった。ある人は自分のことは自分ですべきであるとして, 知らないふりをして通っていく。ある人は頑張れよと励ましの言葉をかけて過ぎていく。ある人は同情して一緒に後ろから押してあげる。最後にお釈迦様がそこを通りかかった。しかし, お釈迦様の姿は

その男には見えません。お釈迦様はその男の難儀を見て、その男の背中を軽くスーと押しやってやった。その力に助けられて男はぬかるみを抜けて坂の上に達することができた。でも、お釈迦様の姿は見えませんから、男は助けてもらったことに気づかずに自分の努力で困難を乗り越えたと満足している。教育とはこのお釈迦様のようにあるべきだ、というのです。放っておくのも教育だし、励ますのも、手助けしてやるのも教育でしょう。しかし、知らせずして本人に自信をもたせることができたらみごとと言えます。

## 9) 困難はくぐり抜けよ

井上幸治さんはカルメル修道会の神父さんです。いろいろ迷い悩んでいた学生の頃、前世紀末に若くして亡くなったカルメル修道会のリジューのテレジアという修道女の残された手記を読んで、フランスに渡ってその修道会に入り、何年か勉強して帰国した人です。その著作『人はなぜ生きるか』のなかで、テレジアについて、彼女はある時後輩から悩みの相談を受けて、「困難はそれと戦ったり、その上を乗り越えたりするものではなく、その下をくぐり抜けるものだ」と答えたというエピソードを紹介しています。つまり、戦ったり、乗り越えたりするものとして困難を考えることは、困難を自分の外の、固定化したひとつのものとして扱うことです。この様なとき、相対的に自分の方が強ければ、困難を蹴散らすことができるでしょうが、向こうが強いときはやられてしまいます。そして、何よりも自分は困難の外から戦うのですから、困難の外にいますから、

- 156 -

困難と肌をあわせることはありません。場合によってはその解決を他人に依頼することもできるのです。だから困難から新しい経験を得る、学ぶことがない。それに対してくぐり抜けるときは、困難の中に入り込みますから、困難にじかに触れざるをえません。苦難の火の粉を浴び場合に寄っては、多少は火傷もします。しかし、くぐり抜けるのですから、困難の外に立つわけではありません。その場面では、困難を引き受けて、困難とともに生きるのです。そういったときいわばマニュアルはありませんから、頼りになるのは忍耐と、その時々工夫であることになります。

人生の中で、日々我々は困難に面します。避けては通れないし、かといっていちいち戦っていては身が持ちません。ともに生き、柔軟にくぐりぬけるのでなければなりません。さらに、困難にそのようなやり方で触れることによって、こちらにも学ぶことがたくさんあり、自分も変化し、成長します。もっといえば、困難と共に生き、それに触れて、くぐり抜けることを、生きるというのではないのでしょうか。しかしそのときは困難はもはや困難でなくなっています。

## 10) 肥やしも汲めて、ピアノも弾けて

大正時代は日本にとっては比較的自由的な時代で、いろいろな思想や、社会運動が現れました。教育についても八大教育思想などといって、様々な考え方がでて、それに基づ

いて学校が創設されたりしました。その中で、今の玉川学園の創設者の小原国芳さんは「全人教育」ということを主張しました。専門だけ詳しくやって全体としては分業というのではなく、一個人としていろいろなことに触れて総合的な人間になることを理想としようというのです。そのことを、具体的な標語で、「肥しも汲めて、ピアノもひけて」といっています。

大正期でいえば、ピアノが弾けることは、誰にでもできるわけではない特別な上品なことがらでした。小原さんのいうのは、ピアノを弾けることそれはそれで結構なのだけでも、それだけでは一方的で、ピアノと同時にあまり品の良くないことの代表である肥し汲みも平気でできる、そうでなければいけないというのです。これは皮相的に考えれば、その人のもっているいろいろな能力を開発することが大切だということですが、深く考えれば、ここで要求されるのは、ピアノと肥しの中に、上品下品という差別をしないでいれるという、心のあり方の問題になります。食べ物でいえば、レストランで高級フランス料理も食べられるが、薄汚い路地で少しぐらひは腐った食べ物でも同じ様な態度で平気で食べれるということなのです。

大正期でも今日でもそうですが、教育とか学校というのは、そこに行かなかった人にはできない、何か特別なこと、例えばピアノを弾くような、そういったことを身につけるところだと考えられています。だから学校に行くことは、他の人に対して一種「抜け駆け」をする事であり、教える方も教わる方も、それでよいと思っています。ここでのいうのは、そうではなくて、特別のことも訓練の結果できるようになる、それは結構、しかしそれと同時に、平凡なこと、労多くて人の嫌うようなこと、汚れたこと、こちらもできるのが、人間の理想であり、また教育はそのような人間を育てるべきだということです。

## 1 1) 牡蛎の安全観

だれしも身の安全を確保したいと思います。それは小さくは自分の身体の安全であったり、もう少し大きくは生活の安定であったりします。その安全に立って、己の能力を十全に発揮することができれば楽しい人生であることとなります。

それはその通りなのですが、どの様にして安全を計るかというときに、2つの考え方があります。第一のやり方は、自分の周りにいわば防御の柵をはること、自分を城壁で囲うことです。攻めてきても自分まで届かない安全な聖域を確保しようということなのです。これは一応いいのですが、しかし城壁を破るような強い敵が来たときはやられてしまいます。そこでそういうことのないように、限りなく防御を厚くしようということになります。身を鎧甲で固め、堀を廻した城郭の奥深くにひそむということなのです。しかしこのやり方では安全が確保されれば確保されるだけその人は自由が制限され、孤立するということになります。この例は極端ですが、それでも、身の回りを囲むというやり方での安全の計り方は、日常我々のよくやるものです。これをアメリカの一般意味論の指導者



であるS・I・ハヤカワは「牡蛎の安全観」と名づけています。

ハヤカワはこれに対して周りを囲まずに裸でいた方がかえって安全だといいます。防御壁を張り廻す代わりに、人間としての知恵と機転と熟練をフルに動員するのだということです。例えば、私たちは車を運転していて、高速道路を用いて短い時間で遠くに行ったり、混雑している都心を通り抜けたりして、事故もなく帰ってきます。このとき私たちは無防備です。まさか危険だからといって、重戦車で高速道路を走る人はいません。無防備でも知恵と工夫と慣れで無事帰ってこられるのです。そして、こちらの場合は、動きは自由で、孤立することなく、その時々周囲の世界に直に触れ、周囲から学び、成長することができます。そしてそれによって益々自身は安全になるのです。ただしここで必要なのは、知恵と工夫と、そして、未知のことがらを恐れない、言い換えれば、未知なものに興味をもつチャレンジの精神ということになります。

## 12) 箱根の山籠

これは私自身のことです。だいぶ前の話ですが、友人数人と箱根へ行きました。箱根は関所の跡が博物館になっており、そこに昔のいわゆる山籠が展示してありました。箱根越えをするとき乗るものです。山籠というのは、大名籠と違いますから、意外と小さいものでした。そこで一同の感想が、「小さいなあ」、「これではきゅうくつだなあ」というのでした。しかし、そこを通り過ぎてしばらくして、顔を見合わせて笑ってしまいました。みんなで誰からとなく気づいたことがあったからです。それは、全員が、籠をみたとき、何も考えずに乗る立場にたってしまうと、だから小さいなあと言ってしまったことです。しみじみと互いを見回したところ、この顔ぶれの中に、当時生きていたとして、籠に乗る身分だと思われる者はひとりもいません。担いでいた方の連中ばかりです。いい世の中になったおかげで、こうしてのんきに見物などしていただけるわけです。籠をみると乗るものと思います。しかし籠はかつぐものでもあります。また縄をない、竹や木を組み合わせ、作るものでもあります。人には先入観があり、それにとらわれますから、大多数は乗るものになってしまうのです。同じ籠も立場によっていろいろであることにはなかなか気づきません。

同じ籠でも乗る立場からみると、担ぐあるいは作る立場からみるのではすっかり違ったものになります。大切なのは、ものやことがらそれ自体ではなく、ものやことがらに対するかかわり合いです。そこを柔軟にしなければいけないということです。

## 13) 頭燃を払う

行動にはその動機が原動力になります。動機がうすいと行動に迫力がないものです。

心理学ではモチベーションといいます。

今日豊かな生活の中では、たいていのものは望む前に与えられていますから、我々はなかなかモチベーションをもちにくい、こうしなければいけないという特に内面の動機

をもちにくいようです。学生においてはなおさらです。

学生などの場合は親元さえしっかりしていれば、何もしなくても4年間のんきに過ごせるわけです。実際何をやるのでもなく、惰性で毎日を、どちらかといえば持て余している者も少なくありません。これは、何かをしなければならぬという動機がないから何もしないということです。一般には食べるということが、仕事や、生ることの強力なモチベーションです。食うために生きるということです。しかし、本来、学生の場合は、自分で稼がなくても食べられるわけですから（このことは悪いことではなく、そこにこそ、学生の特権があり、その特権をフルに生かして学んで、将来に備えるのが、本来の学生の面目です）、それは動機になりません。将来の豊かな生活、名誉、権力、これらは、昔は勉学のモチベーションの最たるものでしたが、今は将来についても何とかなると皆思っていますし、名誉、権力というものの価値はすっかり落ちていきますから、これもダメでしょう。ですから場合によっては、今日の学生の中には、何かしなければならぬというそういう気持ち、それ自体を経験したことのない人もいるのでしょう。

「頭燃を払う」というのは禅の言葉です。髪の毛に火がついたら理屈も何もしないで頭をかきむしりながら駆け出すだろう、切羽詰まるということで、これは待たなしの行動の動機である。そういった真剣さをもって万事に当たれということです。

しかしこの句はもうひとつ踏み込んで解釈できます。それは単にことに当たって頭燃を払うような気持ちになれというのではなくて、いますでにお前の頭は燃えさかっているぞ、火がついているぞ、ただお前が知らないだけだということです。私たちの生活は、モチベーションが与えられないから、何もする気にならないなどという暢気なものではなく、よく考えてみれば、気づいていないだけで、すでに頭に火がついているのです。いますぐ、駆けださなくてはなりません。そういうことです。

#### 14) 脚下照顧

これも禅の言葉ですが、よく知られたものです。むやみと突っ走るだけでなく、ときに自分の足元、自分の置かれた基盤を反省してみなさい、自己のよって立つところを承知していることが何にもまして重要である、そんな意味です。

それはそれでいいのですが、実は、あまり一般にはそこまで言われませんが、この句の後に、「元来自下の脚下は虚にして力無し」という句が続きます。そこが面白いのです。足元を見よ、というだけではなくて、実は君達の足元は虚にして力無しのだよ、ということです。そうであるのにそのことに気づいていない。そのことに気づけということです。

例えば、我々は、脚下照顧せよといわれて、自らの足元、自己の基盤を反省してみます。そのとき基盤の方はしっかりしたものなのに、自己の方がふらふらしていたとすれば、いけないのは自己の方で、磐石の地盤に自己がきっちり乗っていない、そこを反省するのが脚下照顧である、そうとります。しかし後半部分を併せて解釈すると、基盤は

あっても磐石ではない、虚にして力無しなのだ、そういった頼りない基盤の上に実は我々の生活は成り立っているのだ、そうなります。基盤を磐石とするか、虚にして力無しとするかで、我々の生活のあり方はずいぶん違ったものにならざるを得ません。阪神大震災というのがありました。地震以前には、地面が割れたり、屋根が落ちるといふことはありえないことだと思っていました。その前提のもとに、大切なものも家にしまっておき、夜も安心してそこに寝ていたのでした。ところが自下の脚下は虚にして力無しであることが証明されたのです。それでもまだ、それは例外的にそうであったのだ、本来は、あるいは多くの場合はそうした我々に都合の悪いことは起こらないはずだ、とするかも知れません。しかし、我々にとって都合の悪いことが起こるのが世の当り前の姿で、もし都合の悪いことが起こらずに一生安定して生活できていたとすれば、そちらの方が例外であるかも知れません。脚下照顧とはそういうことへの反省なのです。

### 15) 百尺竿頭進一步

これも禅の言葉です。禅の言葉はなかなか人の思いつかないようなところをついてくるものです。

百尺というからかなり長い竿があります。旗竿や物干し竿の長いやつを想像して下さい。その竿へ登っていきます。頂上まで登り詰めます。しかし、そこは終点ではないぞ、なぜ、そこで止まるのか、そのまま、そこで終らずに、もうひとつ登ってみよ、というのです。もとよりその時竿はもうありませんから、空中に飛び出してしまうわけです。常識的には落ちてしまいます。それでもあえて登れというのです。

我々の日常生活は何かにしがみついてその上に成立しています。それから離れられないようになっていて、それに頼り切って、そのことによって安心感を得ています。それを敢えて捨ててみよ。しかしそこには、頼るもののない不安定な世界しかない。何が起こるか分っていない、それでもやれ、そういう意味です。

人生において、ある時は、先行きは分からないけれど、思い切って外に踏み出し、何かに賭けてみる、また、敢えて不安定の中に遊泳してみる、それもいいではありませんか。そのことによって前のことはご破算になって、新しい世界が開けてくるかも知れません。でも失敗つまり墜落かも知れません。それでも敢えてやる、さあどうする、ということです。

「香巖、樹に登る」というものもあります。むかし香巖和尚は大きな樹に登り、高い枝の上に立ち、自分がのっている枝の根本を鋸で挽き出した、さてどうなるかというのです。あるいは敢えて自分のたよっている枝を切ってしまうというのです。これも同様です。

### 16) 教室はだれのものか(学期のはじめに)

みんなの周りにある椅子や机、あるいは教室自体は、誰のものでしょう。正解は一般

には学校のものということになります。学校法人の財産です。ですから皆は、入学したことによって、それを借りて、その使用を許されただけということになる。しかしそれはそうかも知れませんが、そう考えないほうがよいのです。机や椅子は誰のものでしょうか。自分のものです。黒板や窓や、教室も全部自分のものなのです。そう思うのです。だから自分で処分してよいのです。どうぞそうして下さい。人のものにするか、自分のものにするかで、気持ちがたいへん変わってきます。まず机、椅子、教室全体に対する距離、親しみが違ってきます。この大学にきて我々は借り物を使って勉強しているのはありません。自分のもので勉強しているのです。

隣にいる学生は、誰でしょう。他人です。他人ですから、場合によっては用心しなくてはならないかも知れません。実際、うさん臭い奴が隣にいると思って座っている人もいでしょう。しかしそうでなくて隣にいるのは兄弟、姉妹なのです。と考えれば、親しみが湧いて、用心しなくてよいから、気が楽になります。大学はわが家の居間なのです。そういった気持ちで教室に座り、大学で過ごしたらよいのです。大学生活がすっかり変わってくるはずです。

そもそも大学とは何でしょう。自分の外に自分より前からある1つの組織だと考えているでしょう。だから入学試験を通して、外からそれに参加させてもらうのです。しかし、もともと大学の発生は、人間が何人か集まっていわば組合を作り、そして望む講師をよんで教えてもらうというものでした。学生があつてそれから学校が成立したわけです。だから、学校とは学生そのものなのです。学生の他に大学はどこを探してもありません。今は、それが逆転して、大学という組織が先にあって、学生は後からくることになってしまいました。それは社会生活の便宜上、仕方がないにせよ、精神だけはもとに戻って、自分が即大学だ、大学とは俺のことだと思って出発して下さい。大学は自分とは別で、いやいやながら関係しているのだとすると、大学生活も雑になりますが、大学とは自分のことだとすればもっと緊張するはずです。

### 17) ある部員の話(学期のはじめに)

ある大学に野球部がありました。名門野球部です。ある男が入学して、入部しました。まず入部届けを出して、部費を払います。次の日から道具をもって球場に通います。一日も休みません。折々のコンパにも出席して愉快にやります。4年経って、野球部にいたことが有利に働いてよい会社に就職が決まり、無事卒業しました。部のOB会名簿にも掲載されましたから、立派な野球部OBです。ただこの男の奇妙な点は、毎日球場に行きましたが、いつも隅のベンチに座ってグラウンドを眺めているだけで、体を動かさませんでした。だから他の部員に較べたら、ひよろひよろして体力も技術もありません。さて、ところでこの男ははたして野球部員なのでしょうか。確かに、毎日グラウンドにいたし、部費も欠かさず払っていますし、名簿に載っていますから、野球部員です。しかし練習には参加しませんでした。

同様に、次のような大学生は、大学生でしょうか。つまり、学費をきちんと払い込みました。授業には毎回出席しました。何回か代返を頼みましたが、それは帳簿上は出席になっています。出席したときはいつも、友達と喋っていたり、ぼんやりしていたり、その授業に関係ない本を読んだり、関係ない作業をしていたりしました。それでも試験の時は、ノートを借りたり、昨年の問題を暗記したりして、結構いい点で通りました。大学の世話で就職し、卒業し、同窓会名簿に載りました。しかし彼は授業に出席はしていたが、いわば授業には参加していないわけです。こういうのは大学生とは言えないと思うのです。しかしこういった大学生モドキが多いのです。

別の男は、大学に入って、授業にすべて出席し、講義をよく聞き、ノートをとって、授業とともに考え、予習し、復習し、いわばしっかり授業に参加しました。しかし卒業間近になって、もうすべて授業が終わったからといって、大学をやめました。したがって卒業生名簿に載りませんから、大学生ではないわけです。極端な例ですが、しかし、実質的には、こちらの方が大学生ではないでしょうか。名目と実質という問題です。

## 18) オーストラリアの駝鳥

本当かうそか知りませんが、オーストラリアの駝鳥について、こういう話を聞きました。つまり、駝鳥は、砂嵐など、自分に困ったことが起こると、砂漠に穴を掘ってそこに首を突っ込み、見ないようにして、それが過ぎ去るまでじっとしているのだ、ということです。

近ごろ学生にこういうタイプが少なくないのです。何か困難が起こる、すると何もしないで、終るまでじっとしている。要するに自分からは、現状に何か加えるような面倒なこと、自分を苦しめても動かすことは一切しないということです。自分が動くにはエネルギーが必要ですが、それを節約する、そして自分が動くとき自分がそれなりに変化を被るのですが、現状の変化を極端にいやがる、そういったタイプです。そんなことではことがうまくいかないはずですが、それが多くの場合うまくいってしまうのです。というのは、今日、豊かな社会で、周辺の多くの人々にはそれなりの余裕がありますから、その人々は親切心から、人にあまり過酷な負担がかからないように配慮してくれます。つまり、まけてくれる、一般に人々が対人的対応において甘い、厳しさが少ない、そういうことです。周囲がやさしいということです。それに加えて、稀に厳しい状況が来たとしても、本人が何もしないうちに、だれかが助けてくれてしまう、他人が解決してくれる。ですから当人は、何の努力をしなくても、結果的にはことがらいい方向で終了してしまうわけです。そんなことが続けば、味をしめてというか、それなら何もすることはないとなる。

これらの人がなぜ駝鳥になってしまうのかといえば、上に述べたことの他に、彼らは困難に対処した経験がないからだともいえます。何もしない以前に何をしていたか分か

らないのです。しかし経験は項につまねばなりません。それにはその時々与えられた困難に不十分でも自分で対応しなければなりません。そのとき大切なのは「戦う」という姿勢でしょう。唄を忘れたカナリアというのがありますが、人の好意に乗ってしかもそのことに気づかずに自分の戦いを忘れた人間あるいは若者というのも困るのです。

### 19) 帽子の如く, 外套の如く

学生でいるときは良いのですが、卒業して仕事に就いたり、所帯をもつようになると、厄介な問題になるのが、世間の慣習とかお付き合いということです。それらにどれだけ従ったら良いのかです。例えば、会社に入ってある部課に配属されます。するとその会社独特の、あるいはその部課に独特の付き合いの慣習があります。例えば、仕事が終わって一杯やっ払いこうというようなものです。勤務時間後ですから職務ではありません。どちらかといえば意味のない余計なものです。しかしかといって全く付き合わないとしたら、後で批判が続出してなかなか面倒なものです。また部課の仲間に祝儀、不祝儀を出さなければいけない折があったとします。これも全く任意なものですから、出さなくてもいいわけです。それでも慣習にしたがうことにしましょう。さてその金額です。同じ様な関係の相手に対して、ある人は1万円、ある人は5千円であったりすると、5千円の人は相手から、なんだ、あいつは俺に対してその程度の気持ちしかもっていないのかなどと受け取られたりします。

しかし本来、慣習とか、付き合いの仕方とかは、人間が作ったものです。人間が勝手に決めたものです。だからどうにでもありうるのですが、人間が作ったものであるのに人間が作ったものであることが忘れられて、現実がそのようになっているのだと、作りものと現実が混同されてしまうのです。例えば、5千円の祝儀をもって来たものは5千円の気持ちを持って来たとされてしまうのです。また慣習と違ったことをすると、単に違ったやり方をしたというのでなしに、あいつはものを知らない、常識のない奴だといわれます。

どうしたらいいのでしょうか。一般意味論のハヤカワは、優れた人物は、そういう慣習が人工のものだということをよく知っていて、それをあたかも帽子か外套のように軽く頭や肩に乗せているのだといえます。帽子や外套は、着ていることもあるが、いつでも簡単に脱ぎ捨てることができる、つまり彼は慣習に固執しはしません、いつでも止めることができます、しかしながら、慣習を頑なに拒否するのでもありません。帽子や外套が必要に応じてすぐに身につけられるように、慣習を簡単に受け入れもします。しかし、慣習は人のこしらえたものだとしてよく知っていて、それにこだわらないというのです。

### 20) 野の百合, 空の鳥

新約聖書、マタイによる福音書の「山上の説教」の中に、「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の身体のことでは何を着ようかと思ひ悩むな。命は食

べ物よりも大切であり、身体は衣服より大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなた方の天の父は鳥を養ってくださる。……野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。……だから何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかといって、思い悩むな」とあります。

「命は食べ物よりも大切であり、身体は衣服より大切ではないか」、その通りで、本来、食物は命のためのもので、衣服は身体のためのものです。命、身体が主で、食物、衣服は従なのですが、今日の世の中は、その主従が入れ替わってしまって、食物と着物が人生のすべてのように幅をきかしているのではないのでしょうか。グルメだ、ファッションだというわけです。さらに、入れ替わるだけならまだいいのですが、主の方が消えてしまって、従だけしかそこにはない、場合によってはその従を逆に主が追いかけまわす。こうなると何が何だか、何が目的なのか、分からなくなってしまう。確かに、今の世の中は、こんなふうになってしまっているようにもみえます。世の中幅をきかしているのは主を失った従、食物や衣服をはじめ、どうでもよいことばかりです。そういった根無し草が複雑に絡み合って、右往左往しているばかりです。主なるものが何処にあって、何なのか、一向に見えてきません。 どうしたらいいのでしょうか。ここで言われているのは、我々は野の百合、空の鳥に戻らなければいけないということでしょう。彼らは食物に思い煩いもしなければ、着飾りもしません。しかしながら十分に生きて、十分に美しいのです。人間は、何を食べ、何を着るかというような、非本質的なことから何時の時代からか、関わり煩いすぎてきた、そこを考えなおせ、そういうことです。

## 2 1) 地下足袋はいていても偉い人は偉い

東京のベテラン女性漫才に、桂子、好江というコンビがありました。相方の好江さんが比較的若くして亡くなったので、桂子師匠は今ひとり三味線をもって漫談をやっています。この桂子師匠は、苦労人で、小さい頃から、子守や、料理屋の下働きをやって働いてきたそうです。もう大分前になりますが、朝日新聞の父を語るというような欄で、父親からこう言われたと話しています。父親曰く、「地下足袋をはいていても、えらい人はえらい」。

今はあまり、職業の貴賤、差別は言わなくなりましたが、かつては、地下足袋は労務者の象徴で、ニコヨンなどといって、1日240円の日当で、日雇いで道路工事などして生活する人などがいて、下に見られていました。道端で働いている労務者のそばを通った婦人が、連れていた子供に、「あなたも勉強しないとああいうふうになっていまいますよ」と説教したという、今で言えば失礼な(?) 実話もあります。

見てくれや職業で人を区別し、その人の本当の能力や、人格的なえらさを見ずに、そちらだけで人間を判断するというやり方は今日でも一般です。肉体労働であること、見

た目の汚さ、今日で言えば3Kですが、それが即、人格の低さを表すと思われたりします。しかし、見てくれによる序列と、本当のえらさの序列は違います。この2つの序列を同じにしてしまっ、世の中を、ただひとつの序列で見てしまう傾向が我々の心の中には抜け難くあるのです。

しかし、かと言って、世の中にはえらいとえらくないの区別がないかという、それは厳然としてあります。そうでなければ世の中は面白くありません。だから向上心を持つのです。2人の人がいれば、少しの間つき合えば、そこには違いがあつて、そのことはやはり分かるのです。厳然たる人間の差です。しかし、それは身なりの良し悪し、職業の種類にはよらないということです。身なりや職業とは別に人間を判断する目をもてということなのです。

## 22) ミルクを飲む人より、運ぶ人の方が健康になる

イギリスのことわざだそうです。

牛乳は健康によい食品です。それを定期的に飲む人は健康になります。しかしそのためには、その牛乳を毎日家まで運んでくれる、配達人がいます。自転車で、あるいは自転車を降りて戸口までの坂道を駆けて登ってくる人です。その人は、暑さ寒さに関わらず、いつも身体を動かしていますから、その意味で丈夫になります。場合によっては、飲む人以上に健康になります。裏方の仕事も、目立たない仕事も、単に他の目的のための手段に過ぎないのでなく、必ず報いられるようになっている、従属的で、ばからしいと思わずに、こつこつこなせば、時がたつと、それ自体が大したものになっている、そういうことです。

かつて、私は、ある人に、「この頃は、雑用ばかりやらされて、嫌になってしまう」と嘆いたら、「世の中に雑用はない。すべては本来の仕事である」と諭されたことがあります。その通りで、仕事に雑と本はないのです。ある仕事は別の仕事の下請けで、その手段であるから価値が低い、という訳のものではないのです。全ての仕事は平等で、その仕事自体の中に目的が入っていて、みな互いに役にたっているのです。そのように考えれば、どんな仕事も、おろそかにせずに打ち込むことが出来ます。

でも、現時の世の中は、そのようになっています。職業には貴賤があり、貴賤と言わないまでも割のよいものとそうでないものがあり、報酬も大いに違います。しかし、このように、仕事を序列化させて、その優劣を競う（特に報酬において）というのではなく、全体の中でそれぞれの仕事の役割を平等に問う、そして、どの仕事においてでも、意欲を持ち勤勉に働く人が、それなりに報いられる社会が、あつて欲しい社会といえましょう。

その意味で、ミルクを飲む人よりも、運ぶ人が本当に健康になるとすれば、してやったりという事でしょう。



### 23) 人の作ったものは偽である

『橋のない川』という被差別部落を扱った高名な小説があります。その作者の住井すゑさんは、晩年は、老子のいう自然についてよく語っています。

住井さんによると、差別はもともとそこにある区別ではなく、その時々、人間が作ったものである。本来人の作り物であるのに、それを、もともとそこにあるものとして、実体として、絶対視して、本来のものとして、受け入れてしまうことから、差別が出てくるのだというのです。人が作為をもって作る前に存在するのは自然です。そこには差別はありません。ですから、そういった意味での自然に戻るべきだとなります。そこに真実があるというのです。

- 167 -

住井さんはここで面白いことを言います。人と為すという漢字を一緒にすると、つまり、人べんに為すは、偽という字になります。だから人の作ったものはすべて偽なのだというのです。人の作らないところに真実はある事になります。このことを応用して考えると、差別だけでなく、苦しみや、悩みもやはり、人の世にのみあるもの、人の作ったものです。なぜなら、人以外の、家畜や昆虫や植物や石ころの世界、自然の世界には、決して悩みも苦しみもありません。苦しみや悩みは、人の作り物、やはり本来ないもの、偽なのです。人は、自分で悩みを作ってそれに悩む、自分で作り出した苦に苦しむ、そういうことをやっています。もしそうだとすれば、実体のない作り物に振り回されるのはつまらないことです。差別も、悩みも、苦しみも、すべて作り物です。だから幻の如く、偽なるものなのです。そのように承知することが、それに由来する問題の解決のカギになります。

### 24) 真民五訓

ガタガタ、キャンキャンなど、実際の音を写した単語を、擬声語と言います。一方、にこにこ、べったり、うきうき、のろのろ、さっと、などは、状態、行動をそれらしく写した単語です。それぞれの音に意味はないのですが、何となくそれらしく思えるから不思議です。こういった語群を擬態語と言います。日本語には擬態語が多いのです。坂村真民さんは、四国は松山に住んで、阿弥陀仏への信仰と詩作に励む、市井の人です。『詩国』という雑誌を出しています。坂村さんの詩の中に「真民五訓」という以下のものがあります。擬態語が使っています。

クヨクヨするな

フラフラするな

グラグラするな

ボヤボヤするな

ペコペコするな

擬態語は人間の行動を表す語ですから、これらは、自分はこういった行動はとるまい

という決意の表明です。坂村さんは全体としてどういうことを言おうとしているのか、自分の体験に結びつけて、解釈してみてください。さらにこれに似せて、擬態語を使って、自分流に、三訓でも五訓でも作ってみませんか。

## 25) 和を知って和すれども、礼をもって節せずんば、・・・

『論語』(学而第一)に、次の句があります。

礼の用は和を貴しと為す

和を知りて和すれども

礼を以て之を節せざれば

亦た行なわれず

ここで、和と礼の2つの言葉が用いられていますが、和とは、全体としての一体感です。和のもとでは、他との区別が意識されませんから、そのことに由来して、面倒のない、気楽な、気持ちのよい世界といえます。調和した世界とも言えます。しかし、こうした和のもとでは、ことがらが先には進みません。引っかかるところがありませんから、全てがあるがままとして、認められてしまうのです。

ことがらが見えてきたり、先に進むためには、全体に切り込んだ区別、差別が必要になります。区別、差別の総合が、形式、秩序です。我々は、和という全体性の上に、特定の区別や秩序を受け入れて、それに従って生きています。これが礼です。和と礼は大きく説明すると、こうなります。

そこで、この一文の意味は、我々は、ある秩状の世界、すなわち、礼の世界に生きているのだが、礼は、単に形式だけというのではなく、その底に、内容的なもの、和、一体感がないと、十分に機能しない。例えば、挨拶することはまさに礼だが、挨拶しても心がこもっていなければ空しい。かといって、それではと、気持ちの良さ、和、一体感だけがあって、そこに何の形式もないと、またことは先に進まない。例えば、挨拶したいという親愛の気持ちがあっても、その表現がなされなければ、ことがらはそれまでだと言うのです。

礼と和、これは形式と内容、強制と自由、というようなことがらに連なる根本的な問題ですが、そのバランスをどうするかということです。

## 26) ひとに頼るな(?)

大学生の自殺というのが、時々あります。まわりの状況がいわば物理的に切羽詰まっている、例えば、多額の借金に追われてどうしようもない、病気で治らない、というのはある程度仕方がないとして、なかに多くは、心持ちの問題として、ひとりで自分を追いつめてしまう、人にちょっと相談すれば道が開けたのに、そうしなかったというのが、ある意味で残念なことだけれども、あります。なぜ人に相談しないのか、そういう人にはむしろまじめな人が多いのですが、おそらく、人に頼らない、自分だけでやっていく、

人に迷惑をかけないというのが、世間一般に美德とされてきたことに、原因があるのではないのでしょうか。

世の中には、無神経に、のべつ他人に迷惑をかける者もいます。しかし、多くの人が、なぜ人に迷惑をかけないように過度にかたくなになるかという、突き詰めると、その裏には、人から迷惑をかけられたくない、自分も人に迷惑をかけない代わりに、人も自分に迷惑をかけて欲しくない、そのための予防線のようなところがあるのではないのでしょうか。

こういった考え方は、まさに近代の個人主義に由来するもので、そこでは、孤立した独立した個人が究極の単位になっていて、それがしっかり確立されていることが、人間のあるいは社会生活のあるべき姿とされるわけです。そこには人と人との本質的なつながりが避けられていて、人間が孤立してとらえられています。この孤立性が極まると、他人はすべて競争相手で、日々が勝負ということになります。今日の状況は多かれ少なかれ、そのようになっています。

しかし、人間が共同生活をしている以上、厳密な意味で、我々は人に迷惑をかけずには生きられません。人に迷惑をかけていいのです。人に相談してよいのです。ただ当然人からの迷惑も受けいれる気持ちがなければなりません。迷惑をかけたりかけられたりする、そこに孤立した人間観から得られない、人間同士のつながりが展開してきます。人と人との間に窓が開くということです。

## 27) イマジネーション

実業団ラグビーのかつての覇者、神戸製鋼の主将だった、平尾選手が、引退するとき、ある雑誌に文章を寄せて、次のように言っています。

今後のスポーツチームのあり方は、今までのような、全体が一つの目的に向かって一糸乱れない団結を誇る、個々を捨てて全体につく、言われたことを忠実に実行するという、いわば旧来の体育会的いき方でなく、個々人がその場その場で、自分の役割を自覚して、その場で判断して行う、個々人がイマジネーションを持ち、それに従って行為する、そういうものがなければならない、会社組織でもことがらは同じだ、・・・。

ここでイマジネーションという言葉が使われているのが興味を引きました。イマジネーションとは、一般的に言うと、目の前に存在しないものを目の前にあるように想像出来る能力といえます。ないものを仮にあるとして考えられることです。目標とか理想はイメージの代表的なものです。これらは目に見えているものではありませんが、そういうものがイメージされないと次の行動が適切にとれません。抽象能力もイマジネーションの産物です。与えられた全体の構造とか、筋道は、目に見えないけれどもその底にあるもので、直接見える形としては与えられていません。しかし、そういったものを承知することなしには、適切な生活は出来ないのです。

今はいろんな意味で、イマジネーション、つまり、見えないものを見る（想像する）、

そういう能力に欠けている時代です。例えば、映像の時代などといって、テレビに代表されるように、何についても、映像がすぐ目の前に与えられ、そして、人々はそういうものにたよって、自分ではまさにことがらをイメージ、想像できなくなっています。映像過多です。イマジネーションの能力は、言葉によって訓練されます。例えば、「美しい女（ひと）」などという言葉が言葉として小説の中などに書いてあれば、我々はどのような人か、小説は絵ではありませんから文脈から想像するわけです。今日は、例えばテレビを見てしまうと、具体的にそこに、美しい女の見本が出てきてしまい、想像を働かす余地がありません。こういうことの積み重なりが、イマジネーションを貧しくし、理想や、抽象能力を欠如させてしまうのです。

## 28) 言葉の役割, 言葉の汚染

上下水道, 電力, その他, 社会が成立するため物質的, 経済的基盤を, インフラ

(*infrastructure*) といいます。しかし, 経済産業に限定せずに, 全人類の人間としての生活を考える時, 人間生活が成り立つについて, もっと基本的な, 最大のインフラがあります。それは「言葉」です。言葉がなければ人間生活という一大プロジェクトが成立しません。人間は, 環境, 自然を巧みに利用して, あるいは巧みに自分の中に取り入れて生活します。これは言葉を用いることによって, 対象を写し, 分析して, 出来ることです。環境, 自然を言葉で書き割ることによって, 我々はそれに対処します。また, 人間は, 他の人間と協力して, 生活します。言葉によって, 人間同士の共通意志が可能になるのです。環境, 自然との, 他の人間同士との, いわば, 共同生活は, 言葉の上になり立っているのです。

ですから, 言葉について, 次のことは承知しておかなければなりません。言葉をいわば銃弾として, 相手を打ち負かすために, 使おうとする人がいます。(言葉でもって戦うなどといいます)。しかし, 言葉は元々, 戦いの道具ではなく, 和解や, 融和のためのものです。人間は生き物としては本来孤立したバラバラなものですが, 言葉を用いることによって初めて, 共通な意志を持ち, 異なった人々が一つになって行動できるようになるのです。ですから言葉で戦うのは言葉の誤用です。

言葉は公共的なもので, 自分の利益のために恣意的に用いてはいけません。例えば同じ語の意味をその時々で自分の都合のよいように変えて押し通す, 真実味のない言葉を使う, 言葉巧みにだます, その時はそれで通っても, 長い目で見れば, 言葉に信頼がなくなります。これは貨幣価値が日々大きく変動するような信頼のない通貨のもとでは安定した生活が出来ないのと同じです。これを言葉の汚染と言います。環境汚染同様, それよりももっと以前の問題として, 言葉を汚染させてはいけません。

インフラの上に私たちの生活は成り立つのですから, そのインフラを意味もなく壊してはいけません。

## 29) 精神のない専門人, 心情のない享楽人

M.ウェバーの基本的著作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の末尾の結論的な部分に、つぎのような句があります。

「精神のない専門人, 心情のない享楽人」。

この専門人, 享楽人とは何でしょうか。

今日の社会では我々は専門人として生きざるを得ません。分業して, それぞれが与えられた部分だけを, 集中的に, 専門的に扱う。それによって, 高質と, 高能率を得る, その総合として社会生活があるというふうになっています。それが全体の功利 (全体の幸せ) という目的にとってもっとも合理的ということになります。近代社会の基本です。一方, それでは, 何のために人はこのようにして働くのかというと, 近代の個人主義 (これも合理主義の行き着くところですが) では, 究極的には自分の楽しみのためということになります。個人の幸せの追求が近代の原理なのです。働く際の専門人と, その目的としての享楽人, ウェバーはこれが近代の行き着くところだと言います。

しかしウェバーはその専門人は, 精神を欠く専門人, つまり, 専門人として効率よく, 有能なのだが, 全体の見通しに欠ける, 今自分が何をやっているか分からずにただ効率よく事柄をこなす, そういう専門人だということです。

また一方で, 近代人は享楽人として享楽を追求し, そしてそれは専門人としての努力によって成功しますが, その場合, その享楽がバラバラで, 剩那的になってしまい, それらを統一的につなぐところ (心情) がない, 断片的な享楽になってしまっている, そういうのです。

ウェバーのこの言は, 20 世紀初頭のものですが, 今日でもよく当てはまります。我々の問題は, ここでいわれている意味での, 精神とか, 心情といういわば全体性を, 専門性, 享楽性という合理性, 個別性を殺すことなく, それに背反する事なく, どう回復させるかということです。このことがうまくいけば, 何か, 新しいものが見えてくるのではないのでしょうか。

## 30) 事実があれば安心する

今年受け取った卒業論文に, 自由について論じたものがあって, その中に次のような文がありました。

ふと今, 自分に対して不安が湧いたとする。そのとき人は何をするのだろう。自分には何があるか, 一つ一つ事実をあげていく。「学校に行っている」「仕事がある」「結婚している」「家族がいる」等。人に対して言えるような客観的事実があることで, とりあえず安心する。もしこのような事実がなければ自分はだめだと悲観する。・・・

ここで, 事実というのは, 例えば, ○○大学の学生である, ○○会社の社員である, というようなことです。これは身分証明書を提示して証明できるから事実です。すると

それだけで、自分が確固として存在するとして、あとはそれに頼って安心してしまふ、それでよいのかという反省です。

このことは、もう一方から言うと、裏から言うと、ある年齢に達して、学生でない、会社員でない、仕事がない、それだけで不安になってしまう、ということです。事実がないと、自分が存在しないような気持ちになって、悩んでしまうわけです。

学生であろうとなかろうと、会社員であろうとなかろうと、身分であろうとなかろうと、自分は同じ自分のはずです。しかし、それがそう考えられない。あたかも、身分がない場合は、人間でないような気がしてしまう。

もう少し言えば、人が老齢になって一生を終る、そうすると、葬儀の案内などに、その人の経歴などが載るわけです。しかし、その人の一生とは、その経歴なのでしょうか。逆に、経歴を離れたその人とは何なのでしょうか。昔から、歴史的にも大きな仕事をした人などは、百科事典の項目になって、今日にも残るわけです。それはそれでよいのですが、その時その本人は項目を離れてあったわけですが、その本人は我々の平凡な一生と質的に違った別な人間なのか、こういった疑問です。

つまり、事実を離れて（経歴を離れて、世間の評価を離れて）、生きるとは、純粹に、どういうことなのか、そこに、自由とは何か問題になるのですが、なかなか難しい課題です。—